

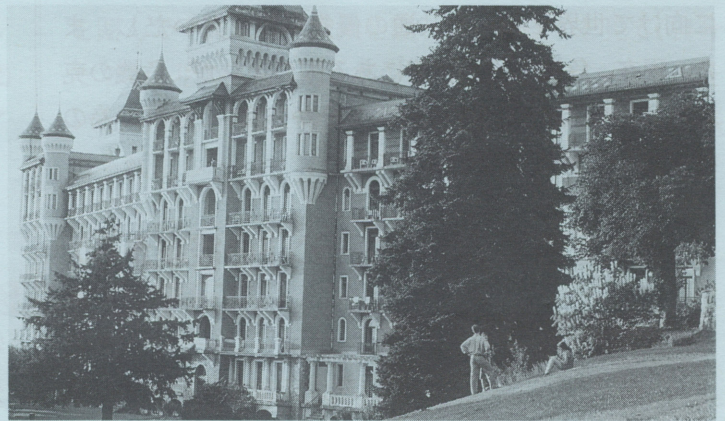
Oct 1999

●特集：第53回コーMRA 世界大会レポート

## 『心のわだかまりを捨ててー新たな出発への誓い』

### 和解の実践の場として

終戦翌年の1946年、スイスのコー(Caux)にあるMRA世界会議場「マウンテンハウス」で第1回コーMRA世界大会が開催されました。以来、マウンテンハウスは、和解の実践の場として、対立する国々や人々の間に多くの融和を生む舞台を提供し続け、今日まで様々な歴史を積み重ねてきました。



● MRA 世界会議場コー・マウンテンハウス

今夏、「心のわだかまりを捨ててー新たな出発への誓い」を総合テーマに開催された第53回コーMRA世界大会は、7月10日から8月22日まで、①『心のわだかまりを捨ててー新たな出発への誓い』(7/10～16日)、②『産業人会議』(7/19～24)、③『都市問題コンサルテーション』(7/30～8/5日)、④『和解の為の鍵を求めて』(8/8～15日)、⑤『21世紀を見据えて、新たな目標や価値観を探るための対話』(8/17～22)の5つのプログラムから成り、延べ80ヶ国からの世界中からの参加者が真摯な対話を繰り広げました。また、こうした一般プ

ログラムの他にも、主に世界中の大学院生を対象に、紛争解決における基礎的な理論と技術を学ぶ『コー・スカラーズ・プログラム』、60名のメディア関係者が集まった『国際コミュニケーション・フォーラム』、日米欧の財界人による『コー円卓会議』、そして、24ヶ国から34人(内11名が国会議員)が参加した政治家円卓会議等も開催されました。日本からは、金子尚志日本電気相談役他、9名が『コー円卓会議』に、田口淳子さんが『国際コミュニケーション・フォーラム』に、荒井佐よ子東京フォーラム代表、総合研究開発機構の福島安紀子、平

### ■主な内容■

◆第53回コーMRA 世界大会レポート・1-4P

「心のわだかまりを捨ててー新たな出発への誓い」

◆第13回コー円卓会議レポート・5-6P

「“節義あるビジネスリーダーシップ”の実践」

◆MRA ワールドニュース・6-7P

・第9回MRAアジア太平洋青年会議開催(台湾)他

◆事務局便り・8P

・「世界の難民のためのチャリティーコンサート」

を終えて/吉田 尊子・8P

・台湾大地震被災者のための義捐金へのお願い・8P

◆別紙：参加体験記

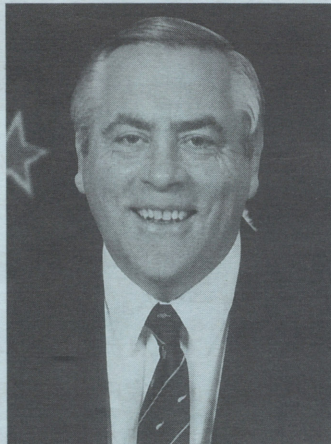


井照水の両主任研究員他が『和解の為の鍵を求めて』のセッションに、そして、藤田幸久、川内博史の両衆議院議員他が政治家円卓会議に参加するなど、総勢22名の参加者がありました。

## 和解の為の鍵を求めて

異文化間の理解を深め、すべてのレベルで平和の為のイニシアチブを促すことを目的として開催された『和解の為の鍵を求めて』のセッションには、ロシア、イスラエル/パレスチナ、韓国、中国、ナイジェリア、ニュージーランド、アメリカなど世界60ヶ国から450名が参加しました。かつては敵同士であった国の人々が、21世紀に向けて世界平和への共通の優先課題を見だし、また、現在、危機や紛争状態にある国の人々が、危機の克服あるいは防止に関する経験を分かち合い、和解の為の鍵を求めて意見交換を重ねました。

### 〈過去を癒す：ニュージーランドの経験から〉



●ダグラス・グラハム氏

ニュージーランドの法務大臣兼先住民マオリ族折衝担当大臣のダグラス・グラハム氏は、『過去を癒す—ニュージーランドの経験から』と題して行われたワークショップで講演し、英国と先住民マオリ族との間に和解をもたらす為、これまで過去10年にわたって行って

きた取り組みについて、その概要を述べました。

1700年代後半から、新天地を求めて多くの白人が移住するようになったニュージーランドでは、土地の所有権をめぐる白人とマオリ族との間で武力衝突が深刻化しました。1840年、イギリス政府とマオリ指導者との間に、マオリの資源保全及び英国市民権共与と交換に、彼らの主権を英国に譲り渡すことを定めたワイタンギ条約が締結されましたが、その後、ワイタンギ条約をめぐる権利回復要求が1980年代後半から高まりを見せました。現在、このワイタンギ条約の担当大臣でもあるグラハム氏は、

「ヨーロッパ人の入植が始まって20年の間に、入植者の数は先住民の数を上回り、今世紀の初めには、先住民が所有する土地は全土の僅か5%になっていた」と指摘した後、土地を奪われたと訴える先住民の700件にも及ぶ賠償請求や、過去百年以上にもわたる彼らの喪失の苦しみに、一体どのように対応すればいいのだろうと参加者にも問いかけました。1990年以降、未解決だった賠償請求の半数以上は、700百万ニュージーランド・ドル(NZ)相当の現金と土地の補償によって妥結されましたが、グラハム氏は「永続性のあるものとする為には、解決法が公正でなければならない」と付言しました。またグラハム氏はこの問題解決に関する重要な点として—

①英国女王から正式な謝罪が行われたこと。②これまで認められていなかった文化的な慣習等が見直され、是正されたこと。③資金、資産面に関しての問題が解決を見たこと—の3つを挙げました。

### 〈犠牲者から癒しの人へ〉

又、同じく先住民との問題で揺れる隣国オーストラリアからは、『盗まれた世代』と呼ばれる隔離政策の犠牲者の一人でもあり、現在アボリジニ(オーストラリア先住民)として和解のための活動に取り組むヘレン・モランさんが“国家の謝罪日と癒しの旅”をテーマにワークショップを行いました。1世紀以上にわたり、アボリジニの子供達を、その家族から強制的に引き離すという隔離政策が、今日のアボリジニの人々の高い自殺率、アルコール依存症、児童虐待といった問題等に大きな影響を及ぼしていることが指摘されていますが、現在、多くの草の根運動に携わる人々の唱導が、多くのオーストラリアの人々の心を打ち、その結果、この問題に対応する為の国としての要綱も作られ、癒しのプロセスが具体的に様々な形で進められていること等が報告されました。



●ヘレン・モランさん(写真手前右)とオーストラリアからの参加者



## 〈癒す側と許す側〉

アフリカ民族会議(ANC)所属の白人の国会議員、マラニー・パワード夫人は、『真実和解委員会』のスタッフでもあった夫のウィルヘルム氏と共に、南アでの経験を語りました。パワード夫人は、「和解は、安価に、そして容易に実現するものではありません。それは、生涯をかけて国に尽くそうという、長くかつ苦しみに満ちた道なのです。和解への道の第一歩は、過去を正しく見つめ、かつ過去の話に耳を傾ける事でした」と述べ、同時に、南アの新しい未来を築くために、黒人の人たちが白人を許すという驚くべき寛大さを示したことを賞賛しました。

またイスラエルから参加したある平和活動家は、このセッションに出席していたパレスチナ、レバノン、エジプト、ヨルダン、シリア各国の人々に謝罪した後、「過去の歴史の中で、我々皆が受けた傷を癒す為に共に働こう」と呼びかけ、「真の平和は、国家間の武力によっ

●韓国のワークショップの様子。リー・チャンホ氏(写真中央)とキム・テジ氏(写真右)



てではなく、相互の信頼と許し合いによってのみ実現するのです」と強調しました。10名が参加した韓国からは、キム・テジ(前駐ドイツ及び日本大使)とリー・チャンホ(駐ドイツ大使館一等書記官)の両氏が、昨年に続き、現在も緊張が続く朝鮮半島の問題についてワークショップを行いました。又、中国と台湾からの代表が共に食卓を囲んで率直な意見交換を凶っている様子を見て、自分たちも、北の人たちと、あのように話し合いをしてみたいと述べた言葉に、現在の朝鮮半島の現実の厳しさが感じられました。

## 〈出合いが起こす化学反応〉

コー・マウンテンハウスでは、ロシア人とチェチェン人、イスラエル人とパレスチニア人、エリトリア人とエチオピア人、インド人とパキスタン人等々、対立する国や民族に属する人々が、共に食卓を囲んだり、キッチンで働いたり、ミーティングを持ったりしている姿がみられます。色々な状況の中から参加した人たちが一堂に会し、胸襟を開いて話し合うとき、不思議な化学反応ともいえるべき変化が生まれます。「どのように自分を変えようか」というテーマである日の午後にかかれたセミナーでは、インドからの参加者が、ヒンズー教徒とイスラム教徒の和解のための活動を紹介していました。続いて、イギリスに住む、パキスタン人の参加者が、インドで親切なインド人のホームドクターに出会うことによって、小さい頃から植え付けられてきたインド人に対する偏見を払拭できたと語りました。すると、今度はオーストラリアのアボリジニの女性が、自分たちに多くの苦難を与えた白人たちに対する憎しみを如何に癒すことができただかを話しました。すると、1968年の『プラハの春』の際に父親をソ連兵に殺されロシア人をどうしても許せないとチェコ人の参加者が話し始めました。続いて、コ

ソボからの難民の人が、苦難に満ちたコソボの歴史について語り、セルビア人に救われたという経験を分かちました。

このセミナーの数日後、ロシアから来た人々によるセミナーが開催されましたが、この時、前述のチェコ人がロシア人に対して抱いている感情を正直に話しました。すると、長年にわたって人権運動に携わってきたロシア人の一人が直ぐに反応し、「自分はその時、ソ連のチェコへの侵攻に反対するデモに参加し投獄されました。お父さんのことは本当に申し訳ありませんでした」と謝罪しました。セミナーの後に、この二人が、抱擁し合っている姿が見られました。ひとつの和解が生まれた瞬間でした。コソボからの参加者は、会議場のステージから皆に訴え掛けました。「コソボの私たちに忘れないで下さい。今、皆さんの、声と助け、そして、励ましが必要です。コーは非政府・非政治的組織で、中立なところです。ここでは、異なった背景、宗教、皮膚の色を持ちながらも、それぞれの良心の声に従い、平和と和解のために働こうという気持ちで結ばれた世界中の人たちと出合えるのです」。



## 《第14回コー円卓会議》

### "節義あるビジネスリーダーシップ"の実践

(コー円卓会議ウオーリン議長のメッセージより)

コー円卓会議(以下「CRT」)は過去5年の間に、そのアイデンティティ、目標や具体的行動において大きな変貌を遂げてきました。CRTがフリッツ・フィリップ氏の呼びかけによって初めて開催された時は、貿易赤字問題の解消を目標に少数の日米欧のビジネスマンが集まり、対話を進めようというのが主目的でありましたが、現在はグローバル経済の重要課題である企業経営の透明性、投資、雇用や環境問題の解決において積極的にリーダーシップを発揮していこうという意欲を持ったビジネスリーダー達のネットワークに発展しております。

そして、現在では、いかにして重要な課題を発見し、取り組んでいけるか、社会的・経済的環境を世界的に改善していくためには企業が中心的役割を果たさねばならないということ、一人一人がどこまで認識出来るか、先進工業国と途上国の間、更に、ビジネス界と他の諸機関の間の協業を如何に効率よく推進していけるかが今後CRTが成果をあげることが出来るか否かの鍵を握っているのです。

今回の会議の主目的は、現存する多くの課題を直視することによってCRTが諸問題をどう解決し、結果を出していくべきか、過渡期にある途上国の方々がグローバル化の恩恵により大きく与よう手助けするためにはCRTは何をすべきか、を明らかにすることにあります。既に提起されている解決策の中には、結果をだすためには更なる検討や分析を必要とするものもありますので、大学や国際機関、その他の関係機関の協力が不可欠でしょう。「CRT企業の行動指針」は、倫理に適った責任ある企業行動を律する規範として世界的に最も広く知られ、受け入れられています、今、我々にはこれを実践に移すことが求められているのです。

以下、会議の概要、結論につきご報告致します。

#### ■開催日：1999年7月21日～24日



●コー円卓会議(CRT)の様子

#### ■討議内容

##### 【主要討議内容】:

- 1) 「企業の行動指針」の実践について
- 2) "トランスペアレンシー"(経営の透明性)を通じ、企業としての信頼性と存続を確かなものにするためのCRTの役割について
- 3) 持続的な雇用及び海外投資を可能にするための必須条件について
- 4) CRTのグローバルネットワークとメンバーの拡張、存在意義の拡大について
- 5) CRT財源確保のための基金(CRT Global Values Fund)創設について

#### 出席者(日本側):氏名(50音順・敬称略)

- |          |                          |
|----------|--------------------------|
| 1) 稲岡 稔  | (株)イトーヨーカ堂<br>取締役渉外業務室長  |
| 2) 金子 尚志 | 日本電気(株)<br>取締役相談役【奥様ご同伴】 |
| 3) 金子 保久 | 松下電器産業(株)<br>国際関係担当顧問    |

#### 【オブザーバー/スタッフ】

- |        |   |
|--------|---|
| ・末松 哲治 | (社)経済団体連合会<br>社会本部企業・社会グループ長              |
| ・堤 浩幸  | 日本電気(株) 監査役                               |
| ・沼田 陽一 | 日本電気(株) 国際関係顧問                            |
| ・清田 和彦 | コー円卓会議日本事務局<br>コーディネーター<br>(社)国際MRA日本協会理事 |

【欧米側出席者(ゲスト4名を含む):39名(欧州16、南北米23)】



## ■主な結論・合意事項（概要）

### 【CRTの将来とVision】：CRTは.....

- 1) 世界の主要なビジネスリーダー達のネットワークとして価値観を共有し、社会に影響を及ぼす諸問題に対して行動をおこして行く、という立場を継続する。
- 2) 本拠地は引き続きスイスとする。メンバー以外に世界諮問委員会（WAC = World Advisory Council）を置き、世界のビジネスリーダーとの関係強化・醸成を図る。
- 3) 世界的に認知されている「企業の行動指針」をベースに、個別企業の実績を評価するシステムを作る。メンバーは「企業の行動指針」普及促進に尽力すべし。
- 4) 急速なグローバル化が進展中の世界経済の中で、我々は世界貿易、対外援助、海外投資並びに雇用問題解決にも心を配らなければならない。
- 5) グローバルな課題について高度に調査・研究能力を備えた研究機関との連携を深める。
- 6) 主要な国際機関や政府機関（NGOの他、国連、OECD、世銀、IMF、WTO、各国政府等）との接触を深め、政策決定に影響を及ぼすような働きかけもする。
- 7) メンバー企業、基金、財団や個人からの財政支援の他、健全なる財務体質を実現するため、CRTファンド（CRT Global Values Fund）を創設する
- 8) CRTが、価値観を共有する世界のビジネスリーダーの集まりで、ビジネスに通曉しながら、より良い世界の創造にも意欲を燃やすグループとして世界的に認知されるよう努める。

<註>上記以外に、ウオーリン会長は本会議終了直後の「纏め」の中で、次のように述べている：

"CRTはCRTとしての特色を打ち出す必要性と、限られた人的・財政的資源の有効利用の面からも、CRTとして得意な分野、他の団体等で手掛けてないような分野に注力すべきである。此の点から考慮し、「環境問題」には取り敢えず注力しないこととする"

### 【運営委員会（GSC = Global Steering Committee）の重要合意事項】

- 1) プライスウォーターハウス社との更なる協業を推進する（プライスウォーターハウス社：世界的な会計監査法人。米国を本拠地として世界の大企業と取引しているが、近年コー円卓会議との関係を深めている）
- 2) CRT参加国・参加地域の拡大努力は従来通り継続。但し、「国別の支部開設」を推進することはしない（財政的にも人的にも余裕無し。国により特殊性も有るため。）
- 3) 財政問題
  - ・ 財政的に難しい局面にある。従来からの企業からの寄付金の他、検討中の CRT Global Values Fund は効果的手段となろうが充分とは言えない
  - ・ 日本側としては当面企業からの寄付金に期待できないので、取り敢えず従来通りで行く。但し、経団連への支援要請は行なう。
  - ・ GVF 検討委員会を設置して検討を継続する
- 4) "CRT" の名称について
 

"Caux" という呼び名に違和感を感じる人がいるのは事実。委員会を設置して、名称以外にも、財政問題、行動計画の再検討を行なう。
- 5) 2000年の諸会議予定
  - ・ グローバル・ミーティング（従来からのコーの円卓会議）
    - 9月にシンガポールで開催（9/7日（木）のオープニング夕食会～9/10日（日）の Global Steering Committee まで）
    - 従来からのコーでの開催は困難。理由：参加人員増加によるスペース不足、マウンテンハウス側の準備、スタッフ不足（主として MRA 関係者）、上級ホテルでの開催を望む声があること等。
  - ・ Global Steering Committee 開催：
    - 2月中旬にシンガポールで開催（後日、米国アリゾナ州フェニックス市での開催に変更）
    - 9月のシンガポール円卓会議開催時に同時開催（上記通り）
  - ・ Reginaol Meeting：時間的（人的）、財政的余力なく、開催せず



# MRA ワールドニュース

## 世界のMRA - 最近の動き

### ●台湾

### 第9回アジア・太平洋青年会議開催

#### ■日本からも5名の青年が参加

去る7月24日から8月2日まで台湾にて第9回MRAアジア・太平洋青年会議が、『社会を刷新するための原動力-対話、ビジョン、そして遂行への決意』のテーマのもとに開催されました。地元台湾を初め、オーストラリア、ニュージーランド、インド、スリランカ、カンボジア、マレーシア、フィリピン、韓国、そして、日本からの小宮恵さん（日本大学3年生）、貞廣真紀さん（東京大学3年生）、鈴木里佳さん（塾講師）、武井張宇さん（会社員）、原田愛香さん（同志社大学3年生）の5名を含む総勢40名余りが参加しました。

会議は、5日間にわたり、台湾の古都である、台南市で開催され、陳唐山、台南県知事の『アジア-新しい世紀のための新しい関係を求めて』と題する講演を初め、分科会、各国の自国紹介などの他、台南市長への表敬訪問、そして、環境問題の改善への取り組みを初めとし、理想のコミュニティ作りを目指している、金華社コミュニティ・センターへの訪問・交流プログラム、更には、台南市のアレンジによる市内の歴史的遺跡等の見学、そして、地元の人々の暮らしぶりをかいま見ることのできたホームステイのアレンジもなされるなど、充実したものとなった。台南市での会議を終えた後には、台東市の郊外にある、先住民族の一つ（全部で10の先住民族がある）である布農（ブノン）族の文化村に滞在し、彼ら固有の歌や踊りを初めとする伝統的文化に触れると共に、布農族の青年達とも交流を図った。長い間、二等市民のように見なされてきた先住民族が自分たちの文化に誇りを持って生きていけるよう、この布農文化村を創設した、白牧師は、特に布農族の子ども達の教育に力を尽くし、今や、その中から多くの青年たちが大学生となり、誇りをもって自分たちの文化を紹介するようになっている。インドの東北部のナガ族出身である一人の会議参加者は、白牧師のビジョンに触れ、又、布農文化村での体験を通し、「生まれて初めて、少数民族であることに、誇りが持てるようになったし、自分たちの民族に対するビジョンも抱けるようになった」と述べた。

二泊三日にわたった布農文化村での滞在を終え、最後に首都の台北市に向かった。台北市でも再びホームステイを初め、故宮博物館等の見学等が行われた他、師範大学の会議室で開

●アジア太平洋青年会議の参加者たち



かれた閉会式では、馬英九台北市市長の具体的で有益な話の後、市長から会議参加者の一人ひとりに会議の参加証が手渡された。

10日余りを共に過ごす中で、参加者達はそれぞれの家庭や国の状況等について率直に語り合った。14年にわたる内戦で多くの友人を亡くし、今も彼らのお葬式の様子を思い出すたび、胸が張り裂けるような思いがすると、涙で話が続けられなくなってしまったスリランカの弁護士である参加者は、自国に平和と民族間の融和をもたらすべく、NGOの団体で今も頑張っている。カンボジアの青年団体の指導者を務める4名の参加者たちも、日本や台湾やオーストラリア等の多くの人々の厚意でこの会議に参加することが出来、民主主義の本当の意味や、他の国々の状況等、知り得たたくさんのことを、出来るだけ多くの国の若い仲間達に伝えたいと熱心に話した。最後のミーティングでも、自分の家族の間の上向きな関係性を向上させるといった決意が多く参加者から述べられた。

日本の参加者の一人は、帰国後、仲良くなった韓国からの参加者から韓国に招かれたことをきっかけに、韓国の文化への関心が深まり、韓国語を学ぶ決心をしたという。これまでの9回のMRAアジア・太平洋青年会議を通し、延べ360名余の青年たちが、このように親しい友人たちを作ったことにより、お互いの国々への関心を深めている。今回の台湾の大地震に際しても、これら青年達から台湾の友人達の安否を気遣う問い合わせがMRA事務局に相次いだ。この地域の青年たちの友情と信頼のネットワークが大きく確実に育っていると強く感じさせられた。



## ●ブラジル

## MRA 南北アメリカ会議の開催

去る10月1日～6日に掛けて、「MRA 南北アメリカ会議」が、ブラジル、アルゼンチン、パラグアイ、コロンビア、コスタリカ、アメリカ、そして、イギリスからの参加者を迎えて、ブラジルのサルヴァドールで、「グローバルゼーションと人間の価値観」、「教育者の真の仕事」、「世代を超えたミーティング」等のテーマで開かれました。同時に、南北アメリカに於いてMRAの活動をどのように進めていくか、又、来年の2月にインドで行われるMRA世界連絡調整会議、ラテン・アメリカ連絡調整会議、2001年にコロンビアで開かれる予定のラテン・アメリカ青年会議、MRAラテン・アメリカ・ウェツプ・ページ、そしてMRAの名称等についての議論もなされました。

## ●ポーランド

## 第2回企業倫理国際会議

来る11月4日から6日にかけて、ポーランドで第2回企業倫理国際会議が開催されます。より大きく統合されつつある欧州という背景の中で、東西ヨーロッパの企業関係者がポーランドに集います。

この会議は、スイス、コーでの「産業人会議」に参加したポーランドの企業関係者によって主催され、「仕事と人の尊厳—労使関係の中で」「責任と協働—共通の利益の為に共に働く」をテーマに話し合いが行われます。地元ポーランドの企業関係者を初め、公的機関の人々も全面的にこの会議を支援することになっています。

## ●オーストラリア

## 12月、シドニーでMRA 国際会議開催

来る12月3日から7日にかけて、オーストラリアのシドニー（於：コロラド国際会議場）でMRA主催の国際会議が開催されます。

この会議には、オーストラリアを初め、アジア太平洋地域の各国から参加が予定され、「希望を分かち合う—新しいコミュニティーの形成に活動の重点を置いて」を総合テーマに、全体会議、パネルディスカッション、そして、ワーキングフォーラム等が行われます。西暦2000年を間近に控え、来る新たな世紀への共通のビジョンとコミュニティーのあり方等について話し合いが行われます。（詳しくは事務局までお問い合わせ下さい）

## ●イギリス

## 500台のミシン、そして更に・・・

近年、イギリスから併せて500台以上のミシンがジンバブエに送られました。秘書の仕事を退いたMRAのメンバーであるイレーヌ・オーウェンさんは、1980年代の初めにジンバブエを訪れ、ファースト・レディー（大統領夫人）であるサリー・ムガベ夫人に会いました。ムガベ夫人がイレーヌさんに、「多くの若いジンバブエの女性達が仕事を得るにはミシンがあるととても有り難いのです」と語ったことから、イレーヌさんは帰国後、この事を友人達に話しました。すると友人の幾人かが自分の使っていた中古のミシンを提供することを申し出てくれました。更にこの話は次々に広がり、ジンバブエにはミシンだけではなく、たくさんの衣類や何千冊もの児童用図書も送られました。こうした要請が次第にアフリカ各地から彼女に届き始め、ボツワナやガーナにもミシンが送られました。その結果、ジンバブエ、ザンビア、そしてボツワナの大統領夫人達が感謝の気持ちを示すため、訪英の際に、彼女の簡素な住まいを訪ねるといったことになりました。

## ◆ヤング・ピープルズ・スタディー・グループ (YPSG) がスタート！

～リュウ・レンジョウ氏（台湾 MRA 協会理事）をゲストに招いて  
対日関係の歴史や中台関係を英語でディスカッション

マリアンネ 和田

去る9月4日（土）に、第1回目のヤング・ピープルズ・スタディー・グループ（若者の勉強会）がMRAハウスで行われた。当初は数人から始めて、次第に口コミでグループが大きくなっていけばいいと思っていたが、最初から9名もの参加があり、思っていたより若い人たちが国際交流に関心を持っていることに驚きと喜びを感じた。参加者は、海外での生活や国際会議を経験をしている者も多く、英語力もかなり高かった。今後の人生計画の中で、国際人を目指しているという熱気が狭い部屋の中に溢れていた。毎月第一土曜日に行われるこの会合では、毎回海外からのゲストを一名招き、その国のことを学んで行くが、第一回目のゲストには、台湾MRA協会

理事のリュウ・レンジョウ氏を招いた。台湾における若者の対日感情や、対日関係の歴史、中台問題などを話し合った。予定の2時間を超える充実した集まりだった。このグループに参加するには中級以上の英語力が要求されるため、英語力に欠ける若者達が参加しにくくなっている。そのため興味はあるが英語力に自信がないという人のために、別のグループを始めることも考えている。今後日本の若い人たちが、自分の国のことも含めて世界の事情をより理解し、日本の代表として自信をもって海外へどんどん羽ばたいて国際交流・国際平和に貢献してほしい。そして、彼らの人生に何らかの影響を与えていけるようなグループにしていきたい。



## 「世界の難民のための チャリティコンサート」を終えて

吉田 尊子

去る9月14日(火)、学習院百年記念会館に於いて、コソボを初め世界中の援助を必要としている人々の為の「世界の難民のためのチャリティコンサート」(主催:むつみ会有志、後援:難民を助ける会、(社)常盤会、桜友会・草上会、(社)国際MRA日本協会)が開催され1200名余りの人々が参加しました。

今年の2月と3月にMRAの会合で、お国の厳しい事情について、ベンジャミン・マーキン氏(駐日ボスニア・ヘルツェゴビナ大使)のお話を伺いました。「自分に一体何が出来るであろうか?」。マーキン大使のお話を聞いてから、ずっと自分に問いかけてきました。マーキン大使の私達への真摯な呼びかけに答えを出さねば、と感じたからだと思います。

“チャリティコンサート”なら出来そうだと思いついたのが、5月でした。古くからの友人のピアノコンサートに出かけたことがきっかけです。難民のためのコンサートという趣旨に協力が得られないはずがないと思ひこみました。そして、その通りになりました。友人のピアニストが無料出演を快諾して下さったことからスタートし、MRAの方々はもとより、次々と協力者の輪が広がり、純益金2,847,190円を

●吉田尊子さん(写真手前左)と相馬雪香会長(写真手前右)



相馬雪香先生が会長をなさっている「難民を助ける会」にご寄付することが実現しました。

コンサートの事など何も知らない私を、どれだけたくさんの方々も助けて下さったか知れません。友人達は夏休み返上でこの計画に真剣に取り組んでくれました。「助けを必要としている人に、出来ることをしよう」。その趣旨を純粋に理解して下さったこと。そして、この機会に自分も役に立ちたいという気持ち。私同様、自分が出る環境にいるということへの感謝の気持ちなど、全てが結びついた結果だと思ひます。一人一人の力は小さくとも、助け合うことでここまで出来るということ、趣旨に賛同して頂けたら、ここまで助けて頂けるということに感謝と感動を覚えます。

自分の信ずることに、迷わず突き進めた機会を皆様から与えて頂いたことに対する感謝の気持ちは生涯忘れないでしょう。マーキン大使の問いかけに対し、このコンサートが今の私にできる精一杯の答えだったとご理解頂ければ光栄です。

## 台湾大地震被災者のための義捐金へのご協力をお願い

皆様ご承知のように今般の台湾大地震におきましては、死傷者の方々が一万人を越すなど、大きな被害になっております。亡くなられた方々のご冥福と共に、被災された全ての方々が、一日も早く立ち直られるよう心よりお祈りしたいと存じます。

台湾のMRAの関係者は、幸いに被害を免れ、皆さんご無事であったとのこと。又、多くの日本の友人の方々から安否を気遣って頂き大変感激したとの言葉も寄せられております。現在徐々に復旧は進んでいるようですが、完全に回復するまでには、まだまだ長い時間が掛かることと思われ。既に個人的なボランティアとして援助活動に取り組んでいるメンバーもいるようですが、台湾のMRA協会としても、被災者の方々の今後の心のケアをも含め、これからの援助活動の在り方を検討中とのこと。又、台湾のMRA協会として義捐金を集めておられます。

就きましては、当協会としましては、義捐金を集めたいと存じ、ここに皆様のご協力をお願いする次第です。尚、お寄せいただく義捐金が最も有効に使われますように、現地の事情にも通じた台湾MRA協会に皆様のご厚意を託たく存じます。

もし、ご賛同下される場合には、下記の要領にて、義捐金をお送り頂ければ幸いです。

社団法人 国際MRA日本協会  
会長 相馬 雪香

一、振込先 郵便振替口座  
番 号 00180-0-38289  
加入者名 社団法人 国際MRA日本協会  
住 所 東京都渋谷区恵比寿南3-7-5 東光苑マンション802号  
電 話 03(5721)6861  
(お手数ですが、通信欄に「台湾への義捐金」とお書き下さい)  
一、金 額 一口 千円(何口でも可)

## ▼事務局便り

●当協会も後援した、去る9月14日の「世界の難民のためのチャリティ・コンサート」の収益金の中から、台湾大地震の被災者のためにということで、早速、10万円が、台湾のMRA協会に送られました。又、10月9日現在、既に69名の方々から、計31万2千円が義捐金として当協会に寄せられております。こちらも早急に台湾に送りたいと思ひます。皆様の暖かいご厚意に対し心より御礼申し上げます。

●MRA女性の会が来年春ごろにバザーの開催を予定しております。詳しい日程、場所などは改めてお知らせ致しますが、もしご提供していただけたら、ぜひご協力を頂きたくお願い申し上げます。